

# 生涯発達における自立と孤立

## —愛着理論の視点から—

吉川 成 司

### はじめに

本稿は、筆者が資料を収集したり考えを巡らしながら、20年余り「児童心理学」を講述してきた内容の一部をまとめたものであり、生涯にわたる人間発達を考えるうえで一つの大きな視点となる「自立」について考察することを目的とするものである。まとめてみようと考えたきっかけの一つは、答案を採点していると、多くの履修者が、“自立を孤立と混同していた”“新しい見方を学んだ”などの感想を記している場合が数多くあったことである。「自立」は、教育や発達に関する議論では使用される機会が多い言葉である。しかし、当たり前のことのようにいて、案外、「自立」は「孤立」と混同しやすいのであろう。同時に、自立は意味は孤立と対比することによって、明確化することができるとの着想も得た。そこでまず、日常語としての「自立」の検討から始めることにする。

### 1. 自立と孤立の意味

#### 1-1 日本語における自立と孤立

「自立」と「孤立」は、しばしば混同されてしまっているようである。それは何故なのであろうか。まず、「自立」について複数の日本語関係の辞書を見ておこう（引用は主要部分のみであり、例示等は省略し記号等を一部改変した。以下、日本語辞典類からの引用も同様である）。

- ・他の助けや支配なしに自分一人の力で物事を行うこと。ひとりだち（『大辞林』第二版）。
- ・他への従属から離れて独り立ちすること。他からの支配や助力を受けずに、存在すること（『大辞泉』増補・新装版）。
- ・他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること。ひとりだち（『広辞苑』第五版）。
- ・他に従属しないで、ひとりだちすること。他の助けを借りないで、自力でやっていくこと。対義語は従属（『日本語大辞典』第二版）。
- ・他の経済的・精神的支配を受けず、自分の力で物事をやってゆくこと。独立（『新明解国語辞典』第五版）。

これらを通して、「自立」とは、経済的・精神的な援助や支配を受けないこと、それらに従属せず自力でやっていくこと、を意味するものであるといえよう。

ただし、「ひとりだち」「独立」が類義語として挙げられている点が「孤立」と紛らわしいところである。「ひとりだち」は「独り立ち」であり、「独立」とともに、「孤独」「単独」などと

使われる「独」の文字が含まれているため、「孤立」と紛らわしくなっている面があると考えられる。同時に「独」が強調された「独立独歩」などの慣用句もあり、自立が単独の意味であるかのように理解されがちである。ちなみに、「独立」は、以下のように、団体、機関、国家など、より広く社会的に、また抽象的な文脈で使われるようである。そのためもあってか、主として個人を研究対象とする心理学で、「独立」が専門用語として使われることは少ない。

- ・①他と離れて、一つだけ立っていること。また、他のものとはっきり別になっていること。②他人の援助・束縛を受けず、個人が一家をかまえて生活を営むこと。③他から干渉を受けずに、単独で権限を行使し得ること。④他のいかなる権力、特にいかなる他国家の権力にも従属せず、主権を行使する能力を有すること。⑤植民地・属領などが、主権を獲得して新たに独立国となること（『大辞林』第二版）。
- ・①他のものから離れて別になっていること。②他からの束縛や支配を受けないで、自分の意志で行動すること。③自分の力で生計を営むこと。また、自分で事業を営むこと。④他からの干渉・拘束を受けずに、単独にその権限を行使できること。⑤一国または一団体が完全にその主権を行使できる状態になること（『大辞泉』増補・新装版）。
- ・①それだけの力で立っていること。②個人が一家を構え、生計を立て、私権行使の能力を有すること。③単独で存在すること。他に束縛または支配されないこと。ひとりだち。特に、一国または団体が、その権限行使の能力を完全に有すること（『広辞苑』第五版）。
- ・他にたよらないこと。他からの干渉・援助・支配などを受けないこと（『日本語大辞典』第二版）。
- ・他の束縛を受けず、自分の力や意志で行動・生活し、存在すること。ひとりだち。用例「 - 独歩」（『新明解国語辞典』第五版）。

次に、「孤立」についてもみておこう。

- ・①他から離れて一つだけ立っていること。②仲間がなく、一つだけで存在すること。③〔法〕対立・対応するものがないこと（『大辞林』第二版）。
- ・①一つまたは一人だけ他から離れて、つながりや助けのないこと。②対立するものがないこと（『大辞泉』増補・新装版）。
- ・他とかけはなれてそれだけであること。ただひとりで助けのないこと（『広辞苑』第五版）。
- ・多くの中で一つだけ、取り残されていること。助けのないこと（『日本語大辞典』第二版）。
- ・身の回りに・頼り（仲間）になるものがない、不利な立場にあること（『新明解国語辞典』第五版）。

これらのように、「孤立」とは、「孤立無援」の慣用句のように、他から切り離れた状態であり、個人の不利益につながるものと考えられる。

以上、「自立」と「孤立」を日本語辞典類をみてきた結果として、「自立」は個人として望ましい状態を意味し、「孤立」は望ましくない状態を意味するという相違点が浮かび上がってこよう。これは一見当然のこのようであるが、筆者が「児童心理学」の答案を採点していると、

履修者が、「自立を孤立を混同していた」「新しい見方を学んだ」などと感想を記している場合が数多くあった。理由を考えてみると、一つには、「自立」は「独り立ち」であり、それが「単独」「孤独」を連想させ、「孤立」と混同されるという言語上のことなのかもしれない。また、自己責任を強いる現代日本の社会状況が「自立」を「孤立」と混同させてしまっているのだろうか。

なお、発音が同じであるという意味で、「自立」は「自律」(autonomy)とも混同されがちである。日本語辞典類を見ておく。

- ・他からの支配・制約などを受けずに、自分自身で立てた規範に従って行動すること。対義語は他律（『大辞泉』増補・新装版）。
- ・自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること（『広辞苑』第五版）。
- ・自分で自分を支配すること。自分の気まますを抑えること（『日本語大辞典』第二版）。
- ・自分で決めた規則に従う（従い、わがまますを押さえる）こと。対義語は他律（『新明解国語辞典』第五版）。

このように、「自律」が自身の規範と行動というように、個人内関係のあり方を意味するのに対して、「自立」は個人間というか社会的関係のあり方を意味する点が違いであり、これは自立の意味を考えるうえで示唆的である。

#### 1-2 心理学における自立と孤立—依存から愛着へ—

これまでの日本語としての検討に加えて、心理学的な検討に取り組んでみよう。

「自立」と一口に言っても、「自立」概念にはさまざまな位相があることが論じられている（福島，1993）。この点について、岡本（2002）は、表1のように示している。ここで、注目されるのは、それぞれについて消極的と積極的の二面が含まれていることであり、また、幼少期にもそれなりの自立があり、成人期といっても全面的に自立しているわけではなく、同時に女性と男性では自立の状況は異なり、その意味も違うという点である。「自立」概念の多相性は重要な視点を含んでおり、それだけに、自立と孤立を愛着理論（attachment theory）の視点から対比し考察するという本稿の趣旨とは別の方向へと広がりかねず、折に触れて部分的に取り上げるにとどめたい。

さて、『多項目教育心理学事典』（1986）では、自立（independence）を「心理的、行動的、経済的に他人からの援助を必要とせず独立して行動できること」としながらも、「自立は孤立ではなく、他人との望ましい相互作用、人間関係を保ちながら、健康生の高い独立性を保っている状態である」とある。

この説明は、上述の日本語としての検討を通して見いだすことができた、自立が望ましい状態を意味するものであること、社会的関係のあり方を意味するものであることと符合する。また、同事典には、「自律とやや違う概念であるが、自立には自律的に行動できる必要のため、両者を並べて使用することも多い」とあり、自立という個人間関係を、自律という個人内関係と統一的に把握する視点が示されている点も注目される。

さらに、心理学における「自立」を調べてみると、依存との関係で自立が解説されていることが注目される。

『発達心理学辞典』（1995）では、自立について「他者から身体的・心理的に独立した状態」

表1 自立の諸側面・定義・概念 (岡本, 2002)

自立の側面		定義と概念
自立の基本的概念		1. 他者の介助・介入・支配・監督からの離脱 (消極的自立) 2. 自己判断・自己決定・自己統制に基づき、時間的展望を持って、主体的に自分自身の力でやること (積極的自立)
身体的自立		誕生による身体的母子分離・離乳 (消極的自立)
行動的	一般的行動的自立	・歩行の獲得、基本的な行動の獲得 (消極的自立) ・長期的展望のもとに行動のリスクの可能性をも含む結果の予測や自己の能力・役割を考慮した自己決定に基づき、準備・実行・事後処理まで自発的、主体的に自らの力でできる (積極的自立)
	生活行動的自立	・食事、睡眠、排泄、着脱衣など、基本的生活習慣の獲得 (消極的自立) ・衣食住をはじめとする基本的生活全般の準備、実行、事後処理まで主体的に自らの力でできる (積極的自立)
認知的自立		・自他分化の自己認知の成立 (消極的自立) ・親、教師、社会一般の認知の枠組みからの離脱 (消極的自立) ・自己の実現のあり様を肯定的、受容的に認めるとともに他者や外的事象を客観的、主体的に認知できる (積極的自立)
情緒的自立		・心理的母子分離・母親への情緒的依存の減少 (消極的自立) ・親への情緒的依存からの離脱 (消極的自立) ・親をはじめ他者の在、不在にかかわらず、他者との心の交流をもちつつ、情緒的な自己統制ができ、常に一定の心の安定を保てる (積極的自立)
価値的自立		・道徳、政治、思想、宗教、人生、性に関する個人的、社会的価値観において他律的、権威服従的基準からの離脱 (消極的自立) ・個人的、社会的価値観において、行動の指針として普遍的原理原則に基づく理想をめざした自立の基準を主体的にもつこと (積極的自立)
経済的自立		・親への経済的依存からの離脱 (消極的自立) ・相対的に長期的な展望のもとで、自己の能力、性格やリスクの可能性も考慮した主体的な選択に基づき、自己生活を継続的に支える収入を得ること (積極的自立)

としながらも、「かつて自立は依存と対立的な概念とみなされていた。しかし、自立は安定した依存関係の中で達成されること、さらに自立的であることはさまざまな他者との間に多様な相互依存の関係と愛着関係をもっていることが認められてきており、今日では自立と依存は対立的なものとは考えられていない。また、依存という否定的な語に代わって「愛着」(attachment: 次節で論じる)という語が用いられるようになってきている」と説明されている。なお、「発達心理学用語辞典」(1991)でも、「依存と自立」の項目で、同様な解説が他にもみられる。

同様に、柏木(1995)は、親としての発達を焦点として、成人期の自立について論じている。これは、自立が生涯にわたる人間発達全体にかかわることであることを示唆していて興味深い。さてそれによると、身辺生活上の自立＝「ひとりで生きてゆく」ことは大事であるが、自立は「ひとりだけで生きること」ではない、と別次元の自立のあり方が示されている。つまり、社会的存在としての人間の自立という次元を示し、自立＝孤立ではなく、「ひとりで生きてゆく」力をもった人間同士がその力を出しあって相互に支えあう豊かなネットワークこそ求められるべきであり、これは単なる相互依存ではない、と述べている。

また、河合(1992; 1996)は、臨床心理学の視点から、自立を依存とは反対のことであると

考えると、依存を排して自立を急ぐという考えになりがちであり、その結果、自立どころか孤立になってしまうと指摘し、自立は依存によって裏づけられていると述べている。

同じく臨床心理学の視点から、高塚（2000）は、現代の社会的状況を視野に入れ、自立を強いる社会が孤立を強いることになってしまっているという。すなわち、現代の日本社会が自己決定・自立を強いる価値観が支配的であり、その中で育つ青少年は人に頼ることは良くないこととしか感じられなかったり、人とかかわること自体が煩わしいと感じるなどの傾向がみられる問題点を指摘し、人間が他者によって支えられている存在であるという感覚を育てることが大切であると論じている。現代社会における自立を考える視点は、青少年に向けられるばかりではない。現代の高齢社会においては、卑屈に感じることなく必要に応じて、社会や他者からの世話を受ける、つまり人に依存できる力こそ自立なのだとの認識が必要であろう。

さらに臨床心理学の視点から、病的に他者に依存し依存させる、共依存 (co-dependency) というアディクションが指摘されている。この観点に立つと、依存は自身の自立のみならず、他者の自立にも影響を及ぼすことが考えられる。

なお文化的視点からも、河合は、西洋と対比して日本人の自我・自立について論じており興味深い（例えば、河合、1976）。この点に関連して、土居健郎の有名な「甘え」理論があり（土居、1971）、後述する愛着 (attachment) と混同されやすいが、数井（2005）によると、異なる概念であり独立した変数であることが実証的に示されているという。

さて、江口（1966）は、依存（性）(dependence) の概念を発達心理学的に考察し、依存から自立へという発達傾向を前提とする考え方に対して、次のように論じている。「依存性とは、人間にとって本質的な傾向であり、精神的な支えを求めるといふその機能は、生涯人間につきまとうもの」であり、「ただ依存の対象（数や分化、中心化の度合い）や依存のしかた (mode) において異なる」(p. 53)。つまり、「われわれは依存性の発達変容の過程が自立性の発達過程であると考え。すなわち、依存の対象が拡大し、確固たる『依存構造』が形成されていく過程こそ、相対的に真の柔軟な自立性が獲得されていく過程である」(p. 54)。また、自立について、高橋（1968 a；1968 b；1970；旧姓：江口）は、「人間を信頼し、誰とも暖かい関係を持ち、色々な人の行動や反応に関心を持っており、特定の人によってすぐに行動が左右される事なく、最終的には、自分自身で判断が下せる」と述べている。つまり、成熟した依存性を内在させてこそ自立的であり得るといふのである。その後、高橋（1983；1995）は、実証的な研究をふまえ、愛着概念を用いながら、上述の考えを説得的に示している。これらの議論は、自立を青年期からの課題として捉える伝統的な発想を越えて、幼児期から、さらに成人期以降というように、自立を生涯発達の文脈で考える展望を指し示している。つまり、愛着理論は、母子関係のみに焦点を当てた、発達の早期決定論に与するものではないのである。

このように、現代の心理学においては、自立を依存と対立する概念とし、依存を脱却して自立が達成されると考え方から、自立を、次節で論じる愛着と両立する概念とし、愛着を機軸として自立が成り立つとの考え方が一般的であることがわかる。そこで次節では、依存概念と愛着概念の違いを確認しておくことから始めることにしたい。また、自立についてこのように考えてくると、その対極たる孤立についても愛着との関係で検討することが有益なのではないか、との構想が浮かんでこよう。

## 2. 愛着理論

### 2-1 依存と愛着の相違点

上述のように、現代の心理学では、自立を愛着との関係で議論している。そして、この愛着理論は、パーソナリティの社会・情緒的側面を発達・臨床的視点から考えるうえで、最も基本的な理論の一つである（加藤，2004）。愛着理論は、確かに幼少期の子どもの発達や子育てに顕著にみられるものではあるが、決してそれだけに焦点化されたものではない。また、子どもへの愛情の大切さを強調するだけの考えでもない。生涯にわたる人間発達を展望する理論である。さらに、愛着を自立と関連づけて考えるということは、相互扶助と自立とを関連づけるということとも相似しており、夫婦関係や世代関係など家庭のあり方、また、高齢社会、福祉社会のあり方についても示唆的である。しかし、その出発点は、ボウルビイ（Bowlby, J.）に始まる愛着理論である。ボウルビイは、発達論的に、その依存という概念の問題点を指摘し、愛着という新たな概念を提唱した。すなわち、人間の乳児には、特定の対象に接近・接触を求めそれを維持しようとする行動の傾向性が認められるが、それを依存と呼んできたことに対して疑義を唱えたのである。

その要旨は次の通りである。①依存なるものがあるとすれば、それは最も未熟な誕生直後が最大で、その後は減少するはずであるが、特定の対象に対する愛着は生後6ヶ月頃にはっきりとその行動傾向が現れてくるものである。つまり、従来の依存概念はそれを混同している。②依存概念は、二次的動因説、つまり乳児が生理的欲求の充足を養育者に依存しているという意味が含まれているが、生理的欲求の充足は、特定の対象への情緒的な絆を形成するための十分条件ではない。③依存という語にはネガティブなニュアンスがあるが、他者との間に情緒的な絆を築くことは生涯にわたる人間発達にとってポジティブにして必要なことである（繁多，1987）。

すなわち、依存概念は否定的な意味をもち、自立するためには依存を脱却しなくてはならないということになる（巷間の“抱き癖”がつくことを危惧する考えはこれに基づくものであろう）。つまり、依存は徐々に減少していくというか、いかになくてはならないものという捉え方である。これに対して、愛着概念は肯定的な意味をもち、質的・構造的な変容をしながらも生涯にわたって持続するものという捉え方である。

### 2-2 ボウルビイ—エインズワースにおける愛着理論

愛着とは、行動レベルで言えば、特定の対象に接近・接触を求めそれを維持しようとする傾向性であり、関係論的には情緒的な絆である。なお、愛着とは文字上、子どもへの愛情を連想させ、乳幼児期にある子どもが養育者との間に形成する情緒的な絆だけを意味するものようであるが、それは一つの位相に過ぎず、上述のように、一定の自立を成し遂げていても、危機に際してまた危機に備えて、愛着は生涯にわたって必要であり、存在するものである（遠藤，2005）。

また、ボウルビイは、愛着の発達についてその段階をまとめている。詳細は省略するが、愛着の発達段階は、誕生時の行動レベルの近接から、3歳前後からの表象レベルの近接へと徐々に移行していく過程である（詳細は例えば、遠藤，1997を参照されたい）。

さて、ボウルビイによる愛着理論は、エインズワース（Ainsworth, M. D. S.）によって、継承・発展していった。すなわち、乳幼児における愛着の質的個人差に着目し、それを診断する

方法を確立するとともに、愛着形成のメカニズムに関する研究を促進したのである。

愛着の質的個人差は、ストレンジ・シチュエーション法 (strange situation procedure) によって診断され、当初は、Aタイプ (回避型)、Bタイプ (安定型)、Cタイプ (抵抗/アンビバレント型) に分類されていた (詳細は、例えば遠藤・田中 (2005) を参照されたい)。その後、いずれにも当てはまらないDタイプ (無秩序型) の存在が議論されたり、愛着の病理・障害の視点から、さまざまなタイプが論じられている (例えば、遠藤, 1997; 北川, 2005)。

愛着形成のメカニズムとしては、子どもと養育者との社会的相互作用が想定されている (その一例が母子相互作用)。それは、基本的には、言葉以外の五感を介してのやりとりであり、シグナルとレスポンスのやりとりである。この点について付言すると、言葉以前の社会的相互作用という点から、また愛着形成が自立に結びついていくという点から、愛着形成のメカニズムとしての社会的相互作用は、自立の身体性と表現できよう。そしてそれは同時に、「期待」を込めたシグナルの発信とそれに応え「信頼」されるレスポンスのやりとり、つまり期待と信頼の絆である。これは、後述する自立の他者性と表現できよう。さらに、他者への期待や信頼は同時に自分に対する期待と信頼であり、これは同じく後述する自立の自己性と表現できよう。

さて、ボウルビイは、これらを通して、内的ワーキングモデル (internal working model) が形成されることを論じている。内的ワーキングモデルとは、愛着対象との過去から現在に至る社会的相互作用の経験が内面化したものである。具体的には、自分が生きる世界がどのようなものであり、母親などの重要な愛着対象がどのような存在でどのようなふるまうのか、自分自身がどのような存在でどのようなふるまうのか、等に関する心的表象モデルであり、現在から未来への行動を方向づける機能を果たすというのである (表2)。

表2 内的ワーキングモデル (リヴィー, T. M.・オーランズ, M., 2005)

### 1. 安定性愛着

- ・自己 「私はよいし、望まれているし、価値があり、能力があり、愛されうる。」
- ・養育者 「これらの人たちは、私の欲求に対して適切に返してくれるし、感受性が豊かであり、保護的であり、信頼に値する。」
- ・人生 「この世は安全で、人生は生きていくのに値する。」

### 2. 不安定性愛着

- ・自己 「私は悪いし、期待されていないし、価値がないし、無力であり、愛されない。」
- ・養育者 「これらの人たちは、私の欲求に応えてくれないし、感受性が低く、人のことを傷つけるし、信頼に値しない。」
- ・人生 「この世は安全でなく、人生は生きるに値しない。」

なお、広くは男女共同参画社会という社会動向を背景として、また後述する虐待問題の原因の一つとして、閉塞的な育児状況が指摘されている現今、愛着理論は、養育者=母親を自明の前提とし、その影響力を過度に重視する考えとして批判の対象となる面があることは否めず (例えば、高橋・柏木, 1995)、そのような問題点は無視できない。しかし、愛着理論は、“幼児期決定説”ではなく、本質的には生涯にわたる人間発達を展望するものであり、また、“母親偏重”を乗り越え、愛着のネットワークモデル論が提案されるなど (高橋, 1983)、従来の枠組みを乗り越える展望が開いている。また次節で述べるように、生涯にわたる人間発達を展望するためにも、またそれとリンクしている社会のあり方を展望するためにも必要となる、人間としての自立を考察うえで有益な観点を示唆する理論であるといえよう。

## 2-3 愛着と自立

依存と自立、愛着と自立、この両者の関係についての考え方を端的に示すと、表3のようにまとめることが出来る。

表3 自立との関係をふまえた依存と愛着の概念

概念	意味	自立との関係	発達観
依存	否定的な意味	依存を脱却して自立（対立概念）	受動的発達観
愛着	肯定的な意味	愛着を機軸として自立（両立概念）	能動的発達観

われわれは、ともすると、親離れの大切さを考えるあまり、いつまでも甘えん坊ではいけない、などと特定の対象に接近・接触を求める行動傾向を「依存」と捉えてしまい、それを許したままでは自立が出来なくなるように考えてしまいがちである。しかし、むしろ愛着は自立の機軸となり、必要にして不可欠なものであると考えられている。例えば、繁多（1987）が述べているように、自立とは、依存を脱却して成り立つのではなく、安定した愛着の発達過程そのものなのである。ひるがえって、愛着の機能不全は、自立の対極たる孤立に結びついてしまうのではないだろうか。

それにしても、特定の養育者に接近・接触を求めてやまず、依存としか見えない乳児であるが、それがどのようにして自立へと結びついていくのであろうか。

高橋（1989；1995）は、愛着が養育者との社会的相互作用によって紡がれていくとの視点をふまえ、特定の対象に接近・接触を求める乳児期の愛着には、自立を育てる機能があり、それを4つの点から論じている。

## ①人間に対する基本的信頼感の獲得

エリクソン（Erikson, E. H., 1977；1980）は、乳児期の心理・社会的危機として、「基本的信頼感」対「基本的不信感」を論じている。この基本的信頼感とは、先述のように、養育者との社会的相互作用を通じて獲得されるものである。人間に対して基本的な信頼感を獲得できるからこそ、自立に結びついていくのである。

## ②人間関係への関心と理解の拡充

愛着を紡ぐ養育者との社会的相互作用は、他の人間と交わる楽しさ、さらに他者の視点など人間関係の知識を広げつつ、仲間などへと人間関係を拡充していく。人間関係への関心と理解が拡充するからこそ、自立へと結びついていくのである。

## ③探索行動の活性化

愛着と探索も正反対のようであるが、愛着の対象は安全基地の機能をもつために、安定した愛着はむしろ、探索行動を活性化させる。これは先述したストレンジ・シチュエーション法による愛着の質的個人差に関する議論のことである。外の世界に向かう探索行動が活性化されるからこそ、自立へと結びついていくのである。

## ④自己有能感の感得

大人である養育者の側からすると、泣くなどの乳児からのシグナルに応じて、いろいろとレスポンスをしてあげているというのが実感であろう。しかし、愛着を紡ぐ養育者との社会的相互作用の視点では、乳児の立場から考える視点を提供する。すなわち乳児からすると自分が期待をもってシグナルを送った結果として、満足のいくレスポンスが得られた、つまり自分はやればできるという自己有能感なり自己効力感を感得する経験だということである。このように意



欲・自信が感得されるからこそ、自立に結びついていくのである。

ところで、乳児期に、期待だの信頼だのということがわかるのだろうか、との疑問があるかもしれない。確かに本人から直接聞くことはできないし、回想することもできない。しかしこの点、「サイレントベビー」の問題を状況証拠として取り上げることができる。なお、「サイレントベビー」は俗称である。この点、アメリカ精神医学会のDSM-IV (Diagnostic Statistical Manual of Mental Disorder, Forth Edition：精神疾患の診断・統計マニュアル)において、「通常、幼児期、小児期、または青年期に初めて診断される障害」のカテゴリのなかに、「幼児期または小児早期の反応性愛着障害」(傍点筆者；reactive attachment disorder of infancy or early childhood)が示されており、それがさらに「抑制型」と「脱抑制型」に区分されている(アメリカ精神医学会, 1996)。「サイレントベビー」は、その「抑制型」に該当する。なお、反応性とは、生後の何らかの経験による、という意味である(表4)。

乳児は泣いたり笑ったりするからこそ乳児らしいのであるが、泣きもしなければ笑いもしない、そのような乳児のことである。ひょっとしたら、“手がかからないよい子”と判断されるかもしれないが、それどころではない。「サイレントベビー」とは、後述する子どもへの虐待の態様の一つであるネグレクトによってもたらされるというのである。ネグレクトとは養育放棄のことで、乳児からすれば、シグナルを送ろうがレスポンスが返ってこないということにな

表4 DSM-IVにおける愛着障害の診断基準  
(アメリカ精神医学会「精神疾患の診断・統計マニュアル第4版」(DSM-IV), 1996)

■ 313.89 幼児期または小児期早期の反応性愛着障害の診断基準

- A. 5歳未満に始まり、ほとんどの状況において著しく傷害され十分に発達していない対人関係で、以下の(1)または(2)によって示される：
- (1) 対人的相互作用のほとんどで、発達の適切な形で開始したり反応したりできないことが持続しており、それは過度に抑制された、非常に警戒した、または非常に両価的で矛盾した反応という形で明らかになる(例えば、子供は世話人に対して接近、回避および気楽にさせることへの抵抗の混合で反応する。または強く緊張した警戒を示すかもしれない)。
  - (2) 拡散した愛着で、それは適切に選択的な愛着を示す能力の著しい欠如(例えば、余りよく知らない人に対する過度ななれなれしさ、または愛着の対象人物選びにおける選択力の欠如)を伴う無分別な社交性という形で明らかになる。
- B. 基準Aの障害は発達の遅れ(精神遅滞のような)のみではうまく説明されず、広汎性発達障害の診断基準も満たさない。
- C. 以下の少なくとも1つによって示される病的な養育：
- (1) 安楽、刺激および愛着に対する子供の基本的な情緒的欲求の持続的無視。
  - (2) 子供の基本的な身体的欲求の無視。
  - (3) 第1次世話人が繰り返し変わることによる、安定した愛着形成の障害(例えば、養父母が頻繁に変わること)。
- D. 基準Cにあげた養育が基準Aにあげた行動障害の原因であると見なされる(例えば、基準Aにあげた障害が基準Cにあげた病的な養育に続いて始まった)。

▶ 病型を特定すること：

- 抑制型 基準A 1が臨床像で優勢な場合  
脱抑制型 基準A 2が臨床像で優勢な場合

る。努力しても無駄であり、人間に対する信頼感も、人間関係への関心も、自己有能感・効力感も育たずに、心を閉ざし無気力な状態になってしまっているのである。

話を戻すと、養育者との社会的相互作用が適切に機能し、乳児期なりの安定した愛着が紡がれていくと、幼児期には、愛着の対象が拡大する、愛着の対象が機能分化する、愛着を示す行動様式が多様化する、などの変容が生じる（高橋、1983；1989）。そしてこれらは、自立していると考えられる成人の愛着構造なのである。このように、自立への歩みは乳児期にそのルーツがあり、幼児期つまり2歳頃から自立への構造的変容が認められるのであり、構造的・質的変容をしながらも生涯にわたって持続するものなのと考えられている。

具体的には、成人愛着インタビュー（adult attachment interview）、愛着スタイル質問紙（attachment style questionnaires）などの手法が開発され、それらを用いた、幼少時の愛着のタイプと成人になってからのものとの関連など、諸研究が広く行われており、生涯発達理論としての愛着理論の有効性が示されている（安藤・遠藤、2005）。この点、愛着理論における内的ワーキングモデルへの注目も、生涯を通じての連続性を検討するために、つまり個人内での過去から現在をつなげて説明するために、何らかの内在的なメカニズム・モデルを想定する必要性が生じ、さらに成人期の愛着は、認知的にというか表象レベルで捉える必要があることをふまえてのことと考えられる。

なお、愛着に関する臨床心理学的視点から、（安定性）愛着の意義について、リヴィーとオーランズ（Levy, T. M. & Orlans, M. O., 2005）は、先述の内的ワーキングモデルをふまえて、強固で肯定的な自己の発達、向社会的な共感性と道徳性、レジリエンス（心的弾力性）を挙げている。

### 3. 子ども虐待

#### 3-1 子ども虐待の意味

社会全体が暴力的になっているように感じるのは筆者だけではないだろう。ドメスティックバイオレンス、子どもが被害者となった数多くの無差別的で動機なき殺傷殺害事件、学校におけるいじめなど、閉ざされていて人の目に触れない空間で、弱い者に向けられる暴力は、現代

表5 児童虐待の定義（「児童虐待の防止等に関する法律」, 2004）

<p>第二条 この法律において、「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護するものをいう。以下同じ。）がその監護する児童（十八歳に満たない者をいう。以下同じ。）について行う次に掲げる行為をいう。</p> <p>一 児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。</p> <p>二 児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。</p> <p>三 児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前二号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。</p> <p>四 児童に対する著しい暴言または拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。」</p>
--

の日本社会のあり方を象徴しているかのようである。これらと同様な暴力が子ども虐待である。抵抗や逃避ができない幼い子どもに対して、家庭という密室で、養育者から日々繰り返される虐待の問題は、ひるがえって愛着の重要性を訴えかけているかのようである。

さて、「児童虐待の防止等に関する法律」(2000年；2004年一部改正)において、子ども虐待(法律上は児童虐待)は、表5のように定義されている。

一は身体的虐待、二は性的虐待、三はネグレクト(養育放棄)、そして四は心理的虐待である。ここで、語義的に検討してみると、子ども虐待は、英語ではチャイルドアブ्यूズ(child abuse)であるが、このアブ्यूズとは「乱用・悪用・誤用」など、不適切な扱いを意味する。つまり、チャイルドアブ्यूズとは、子どもへの不適切な扱いである。身体への物理的な暴力ばかりが虐待なのではなく、こころに深い傷を与える性的暴力、養育放棄、言葉の暴力も虐待なのである。さらに広く考えれば、愛着という人間関係の体験、平面的ではなく、丸ごと無条件的に受容される体験が欠如し、肯定的な自己評価・自己概念をもてないことがアブ्यूズであるともいえよう。

### 3-2 子ども虐待の実態

子ども虐待の実態については、厚生労働省が発表している統計調査がしばしば引用される。図1は、全国の児童相談所における虐待に関する相談対応件数である。この統計を取り始めた1990年度の1101件からすると、2005年度は実にその30倍以上の34451件である。その他にも、虐待の類型別内訳では身体的虐待とネグレクトで8割程度を占めていること、被虐待児の年齢構成では学齢前で約5割を占めていること、主たる虐待者の内訳では実母が6割程度を占めていることがわかる。なお、虐待はプライバシーが最も尊重される家庭という密室で行われるものであること、虐待者も被虐待児も外部への通告がためられるものであることなどにより、発見すること自体に困難が伴うという本質的特徴を有しており、これらのデータは、虐待も実態の一部に過ぎないと認識を欠いてはならない。この点を含めて、川崎(2006)は、子ども虐待に対応する児童相談所の現場から率直な提言をしており傾聴に値する。

また、社会福祉法人「子どもの虐待防止センター」(<http://www.ccap.or.jp/>)は、2000年に母親の虐待傾向について、ソーシャルサポート、母性意識、家庭環境の葛藤性などとの関連を探った調査研究を報告しており興味深い。

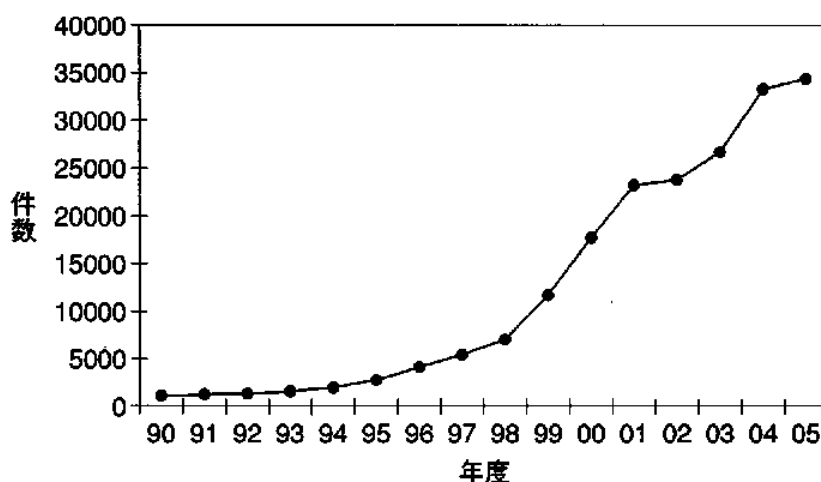


図1 児童相談所における児童虐待相談対応件数  
厚生労働省発表資料より筆者作成(2005年度は速報値)

## 4. 愛着障害

## 4-1 愛着障害とその影響

これまでのように、安定した愛着は、養育者との応答的な社会的相互作用によって、安定的な内的ワーキングモデルを構築しつつ紡がれていく。このことを考えると、被虐待体験は、社会的相互作用の機能不全をもたらし、不安定な内的ワーキングモデルを構築させてしまい、極端な場合は愛着障害（attachment disorder；表4を参照）をもたらしてしまうことが理解できよう（なお、当然のことながら、愛着障害は虐待だけによるものではない）。この点について、加藤（2004）は、子どもと養育者との社会的相互作用の相違が内的ワーキングモデルの相違をもたらし、結果として愛着の質的個人差を生じさせていることを論じたうえで、先述のメインらによる混乱型の愛着は、養育者による虐待が子どもに心的外傷をもたらした結果であると論じている。

表6 アタッチメントと精神障害との関連（北川，2005）

ア タ ッ チ メ ン ト 障 害	<p>アタッチメント型の個人差としての不安定型と同義ではない。将来、他の精神病理を呈するリスクが高いというよりも、乳幼児期においてすでに介入が必要なほど逸脱が極端な障害。</p> <p>DSM-IVやICD-10では、被虐待や養育者の不在を背景として、様々な対人場面で障害が現れるものと定義している。対人相互作用を開始・反応できない、選択的アタッチメントを示さず無差別に接近を求める、などの状態。</p> <p>Zeneh et al. (2000) は、①特定のアタッチメント対象を識別していないもの、②特定のアタッチメント対象はいるが、深刻なまでに不健康な関係を示すもの、③アタッチメント対象を突然喪失した場合に適用されるものの3種類（その下に下位分類）から捉えている。このうち①が、DSM-IVやICD-10で診断されるものと対応しており、特定のアタッチメント対象を識別しないため、様々な対人場面で障害が現れる。しかし②は関係特異的に障害が現れる。③については、アタッチメント対象喪失体験が個人に破壊的な影響を与えた場合にアタッチメント障害に至る。</p>	<p>DSM-IVでは、 抑制型 (inhibited) アタッチメント障害 脱抑制性 (disinhibited) アタッチメント障害</p> <p>ICD-10では、 反応性 (reactive) アタッチメント障害 脱抑制性 (disinhibited) アタッチメント障害</p> <p>Zeneh et al. (1993) では、 ①アタッチメント未成立障害 (Disorders of nonattachment) ・ Nonattachment with emotional withdrawal ・ Nonattachment with indiscriminate sociability ②安全基地行動の歪曲 (Secure base distortions) ・ Disordered Attachment with Self-Engagement ・ Disordered Attachment with inhibition ・ Disordered Attachment with Vigilance/Hypercompliance ・ Disordered Attachment with Role Reversal ③混乱性アタッチメント障害 (Disrupted attachment disorder)</p>
---	---	--

発達的な視点では混乱型の愛着ということであるが、臨床的な視点からは、2-3で述べたように、アメリカ精神医学会のDSM-IVにおいて記述されている。

さて、愛着は生涯にわたって存在するものであり、被虐待体験による愛着障害は、短期的にも長期的にも人間発達に影響を及ぼすものと考えられる。

向井(2003)は、短期的影響として心的外傷後ストレス障害を、また、長期的なパーソナリティ形成への影響として、愛着のDタイプ(無秩序型)、攻撃性・衝動性と対人関係の問題、自己評価の低さと抑うつ、さまざまな精神障害の危険性を挙げている。

同じく、北川(2005)は、まず愛着の質そのものの初期障害、つまり愛着障害(attachment disorder)を、その他と区別して諸見解を整理している(表6)。次に、愛着障害がさまざまな精神病理へのリスクを増幅するなど危険因子の一つとして媒介的な役割を果たすものがあることを論じている。その例としては、不安障害、摂食障害、うつ、解離性障害と境界性人格障害が挙げられている。

さて、すでに述べたように、愛着理論は夫婦関係や世代間関係についても示唆的であるが、虐待の影響は、一世代にとどまらず、次世代へと「世代間連鎖」が生じる場合があるとの指摘がある。そしてここには、夫婦間の愛着不全やそれに伴う家族の機能不全の問題も含まれている(渡辺, 2000; 2004)。

このように、虐待による愛着障害は、養育者の問題を責めることで済む問題ではなく、その背景にある閉塞的な育児環境、つまり育児サポートシステムが欠如した母親の「孤立」を指摘することができよう。単純化しすぎではあるが、孤立した養育者が虐待へ、そして愛着障害へと結びついていくサイクルが浮かび上がってくる。虐待の世代間連鎖は、孤立の世代間連鎖なのかもしれない。

#### 4-2 孤立としての愛着障害

愛着障害は、基本的には内的ワーキングモデルの歪曲である。内的ワーキングモデルとは、自分が生きている世界における自分と他者との関係についての表象であり、それが歪曲するということは、自己と他者の関係、世界の中の自分の位置づけ、そして自己内関係が歪曲するということである。開放的な自己と他者の関係、世界の中に自分を安定的に位置づけること、そして融合的な自己内関係をもつことができないということになる。これは、1-1で確認したように、切り離され、取り残され、助けのない状態を意味する「孤立」に他ならない。そして、これを愛着の文脈で言い換えれば、愛着を意味するアタッチメントの対極をなす、デタッチメント(detachment)ということになる。デタッチメントは、超然や分離などとともに「孤立」を意味する。愛着障害の内実は内的ワーキングモデルの歪曲であり、そしてそれはデタッチメント、つまり「孤立」なのである。

### 5. 人間発達における自立の意味

#### 5-1 子どもの自立と親の自立

1-2ですでに触れたことであるが、親として、養育者としての自立を考えることは、興味深い課題である。また、これは折々に触れたが、高齢社会の急激な進展をふまえると、成人後期というか高齢期の自立も社会的に意義深い課題である。そしてこれらは、生涯にわたる人間発達を射程に入れている愛着理論と結びついた課題であり、生涯のさまざまな位相における自立について、愛着理論と結びつけて考えていくことが必要であろう。

さて、確かに愛着理論は、乳幼児期の親子関係に限定されたものではないが、養育者の自立は、子どもの自立を考えるうえで、切り離すことのできない現実的な課題である。藤本(2004)は、窮屈な育児に悶々とし、自分らしく生きたい、社会の中で自立した生き方がしたいと願う母親が数多いことを述べ、子どもが誕生したその時から、子どもばかりではなく、大人としての、親としての自立が問われるのであり、養育者(母親)の自立と子どもの自立のバランスとタイミングが鍵であるという。つまり、子どもの自立は、養育者の自立(親としての発達)と切り離して考えられない課題なのである。

### 5-2 共生としての自立—自立の他者性—

自立は愛着と矛盾するものではない。ある意味、本稿はこのことをさまざま敷衍して論じてきただけであるが、この両者を統合的に捉えようとするのが「共生」という概念である。共生も、さまざまな文脈で幅広く使われる言葉である。国際関係、環境問題、福祉や教育のあり方など多様である。ここでは主に社会生活を焦点に、「共生」を介して、親子関係以外の文脈から自立について考えてみたい。

金子(1992)は、「自立と依存という関係性の矛盾がきわめて切実に感じられる状況を自ら選び、鮮烈に、勇気をもって、その矛盾に立ち向かうことを、『存在することの力』として生活している人たち」(p.168)として、日常的に介護を必要とする重度の身体障害者による、アメリカの「自立生活運動」を紹介している。

日常的な自立の考え方からすると、このような障害者の自立は困難である。そこで、自立を期待せずに、保護したり収容するということになる。このような自明とされてきた考え方に根本的な疑問を投げかけ、人間としての豊かな関係性を求めたのが、この「自立生活運動」を推進した人々なのである。そして、金子は、『自立生活者』が目指しているのは、(中略)自分と社会の依存性と自立性に関する新しい価値観に基づく、いわば『尊厳のある対等な関係』である」(p.174)と述べ、自立生活者は、その現実的可能性を示したという。さらに、自立生活運動における「自立」とは、「すべてを自分でできるということが自立ではなく、自分の生活に関して、可能な範囲で、自己決定をするということ」(p.175)であると述べている。ここには当然のことながら、失敗するというリスクが含まれる。それも含め、結果はともかく自由意志の発露として自己決定の権利を尊重することを主張しているというのである。

このことは、社会的諸関係の中に生きている健常者にとっても同様である。「社会の提供するものに、必要に応じて依存しながらも自立性を獲得するということ、そのためには、保護を求めるのではなく、自分からリスクを冒すことを存在の尊厳とするということ、そのこと自体が自分の存在の本当の意味—自分の存在の一部だけを切り取られることのない、本来的に備わっている存在に関するすべての複雑性と豊かさを伴った人間としての意味—を見つけることである」(p.177)。

共生としての自立とは、このような単なる相互依存関係を超越して、人間同士が相互に他者の尊厳性—自分が支えている誇りと支えている相手への敬愛—を認め合うところに成立する関係のことであろう。そこには、他者の自立を犠牲にして自分の自立を成し遂げる、あるいはその逆という不均衡はない。他者の他者性、他者の人格を認めることができこそ真の自立なのである。以上、共生を介して自立について考えてみたが、その鍵は自立の他者性にあるといえよう。

## 結びに代えて—人間発達のリジリエンスと自立の自己性

筆者が「児童心理学」を担当し、さまざま資料を収集したり考えをめぐらせながら、「愛着と自立」を講述してきた過程で、映像のなかではあるが、出会った2人の子どもがいる。

一つは、「人体Ⅱ・脳と心」(NHKスペシャル)の一つで、「人はなぜ愛するか—感情—」という番組である。そこで出会ったのが、幸美ちゃんである。5歳も近づく頃、幼児院から野口さんの養子となる。そこで見せる行動が、いわゆる“赤ちゃん返り”である。本当に親になってくれるのかを試す、新規に親子関係を築こうとするなどさまざまな意味を含んでいる。これは要するに、親に対するシグナルである。幸美ちゃんの場合、この赤ちゃん返りは半端なものではなかった。にもかかわらず、野口さんは本当の親ではないが親以上に親らしい存在である。「戦争ですよ」と言うくらい激しい赤ちゃん返りのシグナルもしっかりと受け止めレスポンスした。そのほか途中にはさまざまなことがあったが、小学1年生の後半に、「もう赤ちゃんはやめた」と、自ら“自立宣言”をするようになる。

もう一人がヨウコさんである。「虐待・心の傷を見つめて—暁学園・子どもたちの記録—」(「ETV特集」初回放送1997年9月25日)に登場する。高校生のヨウコさんは、幼少期から虐待を受け続け、自ら家を出て、児童養護施設「暁学園」(愛知県東海市)に保護される。「虐待も元々は自分が悪いからだ」と自分を責めたり、施設の仲間に対して攻撃的な態度だったり、「早く施設を出て自立したい」とのヨウコさん。それは孤立にしかならず、施設で安定した人間関係を築くことが大切と厳しくも温かく粘り強く話し合いを続ける所長。これらを通して、ヨウコさんは自分を認めてくれる存在を知り、施設とも高校生活とも折り合う形での仕事を見つけ、自立への歩みを始める。

これらの事例は、自立が直面する人生の課題を乗り越えるためのものであること、そして人間発達のリジリエンスについて語ってくれている。そのリジリエンスは、愛着があってこそ発揮されるのであろうし、愛着の構造的変容を経つつ、人は自立を歩むことができるのであろう。

本稿は、自立を孤立と対比しつつ考察するという形をとったため、「関係性に基づく自立」の位相を強調してきたが、これに個別の事例をみるにつけ、「個としての自立」の位相を無視することはできない。これはいわば「自立の自己性」であり、この点については、エリクソンに始まるアイデンティティ概念に基づいて考察することが一つの方法であると考えられ、今後の課題として受け止めておきたい。

## 〔引用文献〕

- アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸(訳) 1996 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 (American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic Statistical Manual of Mental Disorder, Forth Edition : DSM - IV.*)
- 安藤智子・遠藤利彦 2005 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房 127-173.
- 土居健郎 1971 甘えの構造 弘文堂
- 江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究 Vol. 14., 45-58.
- 遠藤利彦 1997 愛着と発達 井上健治・久保ゆかり(編) 子どもの社会的発達 東京大学

- 出版会 8-31.
- 遠藤利彦 2005 アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦・田中亜希子 2005 アタッチメントの個人差とそれを規定する諸要因 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- エリクソン, E. H. (著) 仁科弥生 (訳) 1977 幼児期と社会1 / 1980 幼児期と社会2 みすず書房
- 藤本裕子 2004 子育てに誇りを一母親が夢を描けば, 社会が変わる (特集：母子愛着をめぐって) 教育と医学, 52(5), 慶應義塾大学出版会 78-83.
- 福島朋子 1993 自立に関する概念的考察—青年・成人及び女性を中心として— 発達研究 Vol. 9 (財) 発達科学研究教育センター 73-85.
- 繁多 進 1987 愛着の発達 大日本図書
- 柏木恵子 1995 親の発達心理学 岩波書店
- 柏木恵子・高橋恵子 1995 発達心理学とフェミニズム 柏木恵子・高橋恵子 (編著) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 1-16.
- 加藤和生 2004 愛着と児童虐待：愛着の病理 (特集：母子愛着をめぐって) 教育と医学, 52(5), 54-63.
- 河合隼雄 1976 母性社会の病理 中央公論社
- 河合隼雄 1992 こころの処方箋 新潮社
- 河合隼雄 1996 大人になることのむずかしさ [新装版] 岩波書店
- 川崎二三彦 2006 児童虐待—現場からの報告 岩波新書
- 数井みゆき 2005 「アタッチメント」概念と「甘え」 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 239-240. ミネルヴァ書房
- 北川 恵 2005 アタッチメントと病理・障害 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 245-264. ミネルヴァ書房
- リヴィー, T. M.・オーランズ, M. (著) 藤岡孝志・ATH研究会 (訳) 2005 愛着障害と修復的愛着療法 ミネルヴァ書房 (Levy, T. M. & Orlandi, M. O., 1998 *Attachment, Trauma, and Healing - Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families-*. Child Welfare League of America, Inc.; Washington.)
- 松村 明 (編) 1998 『大辞泉』増補・新装版 小学館
- 松村 明 (監) 1999 『大辞林』第二版 三省堂
- 向井隆代 2003 お父さんが怖い—児童虐待と心的外傷後ストレス障害— 桜井茂男・濱口佳和・向井隆代 (著) 子どものこころ—児童心理学入門— 有斐閣 235-250.
- NHK エンタープライズ21 1994 「人はなぜ愛するか—感情—」 [NHKスペシャル 人体Ⅱ・脳と心] vol. 4 フェリシモ出版 (文献資料としては, NHK取材班 1994 驚異の小宇宙・人体Ⅱ 脳と心 4 人はなぜ愛するか [感情] 日本放送出版協会)
- NHK (制作) 1997年9月25日 「虐待・心の傷を見つめて—暁学園・子どもたちの記録—」 [ETV特集]
- 岡本夏木・清水御代明・村井潤一 (監修) 1995 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房
- 岡本祐子 2002 アイデンティティを育てる教育 岡本祐子 (編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 231-241.
- 新村 出 (編) 1999 『広辞苑』第五版 岩波書店



- 高橋恵子 1968 a 依存性の発達的研究1：大学生女子の依存性 教育心理学研究, vol. 16, 7-16.
- 高橋恵子 1968 b 依存性発達的研究2：大学生との比較における高校生女子の依存性 教育心理学研究, vol. 16, 216-226.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達的研究3：大学・高校生との比較における中学生女子の依存性 教育心理学研究, vol. 18, 65-74.
- 高橋恵子 1976 親子関係と発達 岡本夏木・三宅和夫(編) 心理学5・発達 有斐閣 85-111.
- 高橋恵子 1983 対人関係 三宅和夫・村井潤一・波多野誼余夫・高橋恵子(編) 波多野・依田児童心理学ハンドブック 金子書房 607-639.
- 高橋恵子 1989 幼児における愛着と自立 田中熊次郎(著) 児童心理学 創価大学出版会 87-104.
- 高橋恵子 1995 自立への旅立ち [新版] 岩波書店
- 高塚雄介 2002 ひきこもる心理とじこもる理由：自立社会の落とし穴 学陽書房
- 辰野千寿・高野清純・加藤隆勝・福沢周亮(編著) 1986 多項目教育心理学辞典 教育出版
- 梅棹忠夫他(監) 1995 『日本語大辞典』第二版 講談社
- 渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達 金剛出版
- 渡辺久子 2004 愛着とこころの発達(特集：母子愛着をめぐって) 教育と医学, 52(5), 4-12.
- 山田忠雄(主編) 2005 『新明解国語辞典』第五版 三省堂
- 山本多喜司(監修) 1991 発達心理学用語辞典 北大路書房

# **Independence and Isolation in Life-span Human Development : From the Viewpoint of Attachment and Detachment.**

**Seiji YOSHIKAWA**

This paper considers the independence in life-span human development by contrasting with the isolation through elaborating the attachment theory, child abuse and its effects.

The paper is organized in the following way :

Section 1 details independence and isolation in Japanese, and in psychology – from dependency to independence.

Section 2 considers differences of dependence and attachment and Independence networked on attachment through examining attachment theory.

Section 3 outlines meaning of and the actual situation of child abuse.

Section 4 considers isolation as attachment disorder = detachment through discussing the attachment disorder due to child abuse and its effects.

Section 5 argues meaning of independence in life-span human development. In particular independence of children and parents, independence as symbiosis–otherness in independence are argued.

At last, resilience in human development and selfness in independence is discussed.